

MEETING REPORT

Keystone Symposia (The Enzymology of Chromatin and Transcription) に参加して

感染・免疫大部門 宿主寄生体学分野

伊藤 太二

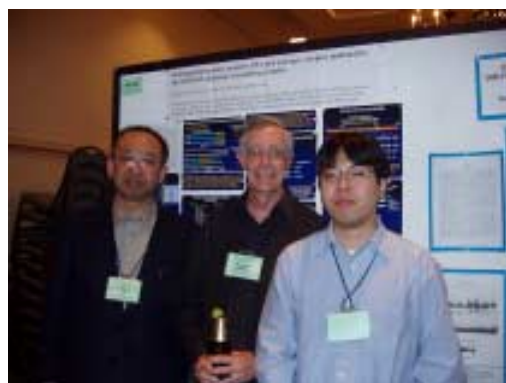
私はこの度、アメリカ合衆国で開催されました Keystone symposia に参加しました。集会名は「The Enzymology of Chromatin and Transcription」で、場所はニューメキシコ州のサンタフェでした。アメリカ南部の荒野の中にある街でしたが、3月ということで、東京ではお目にかかれないような澄みわたった青い空が広がり、気候も温暖で大変過ごしやすく meeting に集中できる環境が整っていました。

meeting の方は、3月10日の夜から15日の夜まで、5日間おこなわれました。朝は8時から夜7時過ぎまでは第一線の研究者と若手研究者による口頭発表を聞き、その後はスパイスのきいたサラダやタコスといった、ニューメキシコ州らしい軽食を食べながらのポスターセッションが夜11時過ぎまであり、非常に活発な討論がおこなわれました。多細胞生物を形づくる細胞は基本的に同一ゲノムを有していますが、それらにおける遺伝子発現には細胞種特異性が見られます。このように、遺伝子機能が選択的に活性化、または不活性化される機構であるエピジェネティクスは DNA の塩基配列を越えた高次の遺伝情報を担うと考えられています。今回の meeting では、この分子機構の中で特に、ヒストンの修飾、クロマチン構造変換といった転写制御にスポットを当てた議論がおこなわれ、これらの分野で世界をリードする R. G. Roeder, J. L. Workman, C. L. Peterson といった博士の方々も数多く参加されて



サンタフェの down town の風景。

いました。私は研究部長の伊庭英夫教授と共に参加しました。私はクロマチン構造変換因子 SWI/SNF 複合体を介した、転写制御因子 AP-1 と ER の相互作用について、そして伊庭教授は主に SWI/SNF 複合体とレトロウイルスの gene silencing について、それぞれポスター発表をおこないました。核内受容体とその共役因子の分野で数多くの成果をあげておられる M. R. Stallcup 博士をはじめとして、多数の先生方との有意義な討論をすることができ、今後、私の課題をどのように発展させてゆけばよいか、色々と助言を頂くことができました。今回の meeting を通して、世界の最先端の研究者から直に最新の研究



ポスターセッションにて。M.R.Stallcup 博士(中央)、伊庭教授(左)、本人(右)。

成果を聞くことができ、また私の研究を広く知っていただき、多くの方と知り合いになれたことは非常に大きな財産となり、今後の私の研究の励みになると実感しました。

編集後記



あっという間に桜の季節も過ぎ、もう新緑の季節である。正門から医科研の構内に入ってくると、本館の後ろに新研究棟と病棟が見え、新たな展開を予感させてくれるようで、少し気持ちの高ぶりを覚える。新井前所長を初めとした前執行部のご尽力のたまもので

あるが、本号では新所長に抱負を語ってもらった。法人化を控え、研究所の舵取りも難しい時期であるが、所長の意向が実現することを願っている。本号の作成にあたり、ご協力頂いた執筆者の皆様にご心より御礼申し上げます。

第21号編集担当 岩倉 洋一郎